

プラトンの社會學的思想

不破祐俊

第一節 序 言

第二節 プラトン時代の社會狀態

第三節 プラトンの生涯

第四節 『國家篇』

第五節 『國家篇』の表現形式

第六節 正義並びに理想國家論

第七節 教育論

第八節 共產主義論

第九節 『法律篇』

第十節 結 論

第一節 序 言

社會學(Sociology)なる語は、オーギュスト・コント(Auguste Comte, 1798-1857)が一八三八年に、その大著『實證哲學體系』(Cours de philosophie positive, 1830-42)の第四卷第三版に於いて、Sociologieとして用ひたに始まり、學的體系を整ふるに至つたのは最近の事に屬する。然

しながら、それ以前に於いて社會研究の存在しなかつたわけではない。人間の集團生活は極めて古く、従つて古來種々なる學者に依つて、人間の社會生活に何等かの説明を下し、これに關する普遍的法則を求めんとする努力は相當古き時代より存してゐた。ギディングス (Giddings) がその著『社會學原理』(The Principles of Sociology) に於いて述べてゐるところは則ちこの意である。

『社會に關するこの正確なる觀念は最近になつて得たものである。凡そ自然界に於いて、生活それ自身の祕密を除いては、社會以外に人間の想像を印したものは無い。生活それ自身以外にかくも想像をたくましふしたるものはない。心像が如何に幻想的なりとも、思索が如何に神祕的なりとも、信仰が如何に無稽なりとも、これを社會の記述、社會の哲學に入らないものはなこ』(P.5)

かくの如く、何等かの意味に於いて、社會現象に就いて注目せるものは古くよりありて、思想家、哲學者のこれに關して説明或は記述せる所のもの多きを見る。而して、かゝる人間集團の構成、組織、その維持及び變遷に關する科學的研究たる社會學的研究の由來を歐洲に於いて訊ねんとするならば、コムト以前に遡るを要し、こゝにプラトン (Platon) の社會學的思想を發見するであらう。實に、プラトンに於いて、社會現象を科學的に觀察し、類別し、普遍化して

概括を試みたるの萌芽を我々は發見するであらう。

ルードイヒ、シュタイン(Ludwig Stein)⁽¹⁾及び其他の人々⁽²⁾に於いては、希臘哲學の始めに溯つて、自然哲學者の思想の中に社會學的思想を認めようとした。然しながら、それ等プラトン以前の研究に於いては、斷片的なる、而して隨伴的なる僅かを見出すのみであつて、これをしる社會學的研究とは認め得られない。また、ソクラテス(Socrates)の人性哲學に於いても、社會現象の研究にも及んだれども、科學的觀察研究とは云ひ得ない。

註(1) L. Stein; Die soziale Frage im Lichte der Philosophie, Zweiter Abschnitt, Umriss einer Geschichte der Soziologie

(2) Emory S. Bogardus; A History of Social Thought, Karl Völzler; Geschichte der sozialistischen Ideen

今、本篇に於いては、この社會學的思想を有したる最初と見做し得べきプラトンに就いて、その思想發展の跡を見んとするのである。而して、本篇の大體は、主として、米のリヒテンベルガー(Lichtenberger)の著『社會理論の發展』(Development of Social Theory)(註)中に記述せる所より採り、間々、ヴィンデルバンント(Windelband)の「プラトン」(Platon)其他を參照しつつ草したものである。

註 リヒテンベルガーはペンシルバニア大學の社會學教授であり、ギディングス門下の一人で、この『社會理論の發展』は、彼が恩師に獻げた最近の著(1933)である。ギディングスの近著 *Studies in the Theory of Human Society* 中 The History of Social Theory を敷衍したもので、社會學史としては手頃のものである。

第二節 プラトン時代の社會狀態

社會學的思想は、常に時代の鏡であり、社會生活を反映してゐるからには、プラトンをして『國家篇』(The Republic)と『法律篇』(The Laws)とを書かせるに至つたギリシヤ史上の重要な事實を先づ述べる必要がある。

ギリシヤ人の住んでゐたギリシヤ半島は、その地形が到る處に山地と狹灣とがあつて、近代的國家をなすには不適當なれども、未だ開け來らぬ初期の社會的條件としては、却つて彼等が小集團の部落をなして、そこかしこに散在するに適してゐた。故に、彼等の信憑すべき歴史時代に入つたる紀元前七〇〇年頃には彼等は小さき自治團體としての生活をしてゐた。時の流れに従つて、これ等のものは、自發的に合併したり、或は征服されたりして、次第に政治的に結合をして、都市國家(Polis)の形式に進んで來た。これギリシヤ特有の都市國家であつた。この都市國家は各々それ自らの法律を持ち、軍隊と神々とを持ち、各市民は自分等の都市國家に對してのみ愛國的の義務を感じ、他の都市に對しては敵對行爲に出づることも屢々であつた。故に、この都市國家が、幾多の波瀾に富めるギリシヤ政治史の全體を通じて、社會的政治的單位であつた。共通の血統であると云ふ傳統は、自分等の誇りにあらわれ、またそれが市民の基礎をなしてゐた。地理的には、都市國家は共に政治單位たる一つの町又は數ヶ町と隣接町村

から成立してゐた。然しながら、社會組織を眞に繋ぐものは血統でもなく、版圖でもなく、それは市民關係であつた。ギリシヤの人々にとつて、都市或は國家は共に同じ意義のもので、倫理的單位なる共同生活であり、即ち人々の結合であつた。プラトンとアリストテレス (Aristoteles) とを支配したのはこの概念であつた。市民生活は通常の生活であり、人々が各自を支持し、集合的全體を維持する關係が社會學的諸問題を構成するのであつた。

ギリシヤ都市國家中にも、彼等の商業的繁榮に依りて有力なる都市國家の一つなるアテネ (Athene) の若干の特性を挙げれば、その國家の人口構成は三十萬乃至四十萬と稱せられ、その約半數は都市自身の中に住居してゐた。職業は廣汎に互つて居つた。農民、技術家、工業勞働者、商人、銀行家、軍人、自由職業者、政治家等に分れ、特に農民、技術家に於いては、分業が相當の程度まで行はれてゐた。

政治上、人口は次の如く區分せられてゐる。則ち(一)は市民が四萬で、その妻子が凡そ十六萬、大體七千の市民は文武官の孰れかの公務に従事してゐた。(二)は外人居住者で、その家族共凡そ九萬、(三)は八萬の奴隸で、中二萬がロウリウムの官營銀山に雇はれてゐた。

この奴隸制度は注目さるべき重要な制度ではあつたが、國家の所有たる奴隸に依つて作業せられたる銀山の利益たるや、國家の全歳入に比しては小部分であるが故に、これを除いては、

かゝる奴隸制度がアテネ政治組織に大きい役割を演じてゐるとは認められない。この制度が、社會生活のあらゆる方面に侵潤し、有閑階級の奢侈を續けさせてゐたにも拘はらず、自由民が勞働に依つて保持する品位と、生産にあたつての熟練とを高く評價し得るが故に、奴隸制度は經濟生活の根柢ともならない。加之、アテネの文明は男子の文明であつた。特に目立つた階級であつたが、さまで多數ならざる娼婦(Hetaera)を除外例として、他の女子は公の場所への出入も、國事に關與することも控えさせられてゐた。女子は家庭の人となり、家事にいそしみ、國家の爲めに子供を育てるのであつた。市場、歩廊、劇場、公會場、訓練所等での自由を享樂し得たものは男子であつた。こゝに男子は集まつて、公の問題や、哲學を議論し合ひ、その結果が、自由制度の發達に、また輿論政治の支配に非常に有力となつた輿論を喚起するに至つたのであつた。

プラトンの如き眞面目なる心を持つた人にとつて、かゝる社會組織は検討の機會を與へた。政治上の各組織は僭主制度から民主制度への移り變りであつた。政治家と煽動家とが交るゝに國政をとつてゐた。デロス同盟(Delian League)の作られるに當つて、種々の國民が一國家に結合させられたときに、新しき組織的市民權が要求された。大規模に民主政治を打ち立てるに絶好な國民的機運が動いてゐたが、この機運は、アテネ自らがその同盟の基金を費消したるこ

とに依つて、破られてしまつた。

ギリシャ都市國家間の協同或は東方地中海に進出せる商業貿易の擴張に依つて助長されたる各國民相互の接觸の結果は、こゝに新しいコスモポリタニズムが創られた。ギリシャ人も、未開の土着民もその過程に於いて相似の點を發見し、人類同胞の新解釋を認めるようになった。かゝる觀念は哲學者でなくては、こゝ迄達し得なかつた。一般に、この事は政治上、商業上の開發にとつて大きい手段を與へたものであつた。

他方に於いて、ペルシャ戰役勝利に依つて齎らされた國家意識の力強き勃興はアテネに、學問藝術に於いて異常な發達を示した。今迄の自然を對象として研究せる科學の態度は、人性そのものを見るに至つた。都市國家間に於ける激しき鬭爭、或は一都市内に於ける貴族平民の階級鬭爭は一切の力を弛緩せしめ、權利や秩序や慣習等に關する一切の既成物に對して疑を持ち始めた。かゝる状態にあつて、次第に人格の價值は高まり、特有の經驗、獨自の見解を立つる意義は明かに認められて來た。實際の事情を知るものゝ判斷こそ尊ばれるべき時代が來た。

かくして、こゝにギリシャ人は、如何なる方面の才能にしても、それが産業的生活に於ける才能は勿論、政治的生活に於いても同様に、それ等は學んで得られるものでありたいとの考が現はれたのであつた。

こゝに於いて、當時の人々は今や市民を教育し、以て有能なる政治家たらしむるべき知識を得ることを必要とするに至つた。この啓蒙的欲求を満し、當時のアテネ青年に、新しきより高き精神的教養を與へんとして現はれたのがソフィスト(Sophists)の一團であつた。彼等は新しき知識の持主であり、それを教へ授るところの職業教育者の一團であつた。かくして學は公の生活の舞臺に昇つて、教へとなり、靜かな學究は街頭に立つ教師となつた。故に、彼等は當時の智的生活に於いて大きい役目をしてゐた。次いで現はれたソクラテスはソフィストと同一思潮に立ちながら、その學說に反抗して、理性に對する普遍的妥當なる真理を確信して立つたのであつた。ソフィストが説くが如く真理を否定したるに反し、彼は真理の存在を説いたが、然し真理の何者かは示さなかつた。この真理そのものを示すことは彼の繼承者プラトン及びアリストテレスを俟つて始めて出來たところである。

當時の紛糾せると共に、熱情的に動搖しつゝあつた状態に於いて、學をば根本から新に創造せんとし、且つ人間生活の全體に互る支配をば要求せんとした彼プラトンの意義を我々はこゝに理解し得るのである。ソクラテスの生活理想に對する感激と、この理想に結ばれたる政治的熱情との中に、勇氣及び力を創り出したのであつた。彼プラトンは決して無關心なる思想家でも學究でもなかつた。道德上、政治上の改革者としての熱き血潮は彼の生涯を通じて、又彼の

一切の著作を通じて脈を搏つてゐた。

かく見來ると、アテネがかのペロポネッス戰役に依つて失敗し、遂ひにはスバルタの指導の下に立たなければならなかつた時、社會上、政治上の崩壞があつた衰微の時代に於いても、偉大な哲學者の熱情に變りはなかつた。古代ギリシヤ生活の威嚴と魅力と忠誠との失はれた國民的衰微の時代を通じて、そこには智的勇氣が疲勞の極にあつたと云ふことは指摘し得ない。

又、この時代に、倫理上、宗教上の變移が著しかつた。古代の神話に於ける家神崇拜が漸次衰へつゝあつた。自然な、人間らしき因果關係が、古き宗教論の道德を追しやりつゝあつた。

神を人の姿に現はそうとする思想が展開しつゝあつた。新しき信仰の教師ソフキスト及びソクラテスの徒が熱心な聽手を得るに至つたのも當然であつた。

かゝる政治上、社會上、倫理上の變化は當然次の如き問題を起すべき可能性が色濃くあつた。「正義とは何ぞぞ。」「社會及び政治生活の眞の基礎は孰れぞや。」「如何にせば人格の最高に達し得られるか。」「如何にせばアテネの榮譽を恢復し得るか。」

『國家篇』と『法律篇』とがこれに對するプラトンの答であつた。(註)

註 Barker; Greek Political Theory, Ch. II.

Bolsford and Sihler; Hellenic Civilization

Grote ; History of Greece.

Barry ; History of Greece.

Windelband : Platon, Einleitung.

第三節 プラトンの生涯

プラトンの傳説に就いては信すべき材料は極めて乏しい。彼の生れた年として最も確らしいのは紀元前四二七年であらう。ペロポネネッス戦後の初年、ギリシヤ史の頂點に於いて、東の間の輝きが、未だその没落の影を蔽つてゐた時のことである。生れ故郷はアテネであつたらう。(註)當時にあつてはヘレネス文化の中心地であり、又その支配者たるの都市であつて、今や恰もその誇りに満ちた勝利の自信を以つて、この戦争に、然も遂にはその榮譽を破滅の淵に導いたところの戦争にその歩みを入れんとしてゐたアテネである。

註 多島海サロニカ灣中のギリシヤの島との説もある。

アテネは民主制度の確立を得て、既にその弱味さへ曝露し始めてゐた。野心家は都市の支配權を自らに奪はんとし、貧富の階級鬭争は前途暗澹たるものがあつた。この濁れる中にも、藝術學問の至高至貴な存在を認めることが出来る。悲劇、喜劇にあらはされた劇詩の藝術、彫刻美、建築美等のあらわれは都市の隨所に見られる。而して、眞摯なる學へといそしむ人々も、

かのソフィスト達と同様に、このアテネへと入り来りつゝあつた。

かくの如く文化生活の最高潮に達した時に、プラトンは時代の一切の熱烈なる憧憬が一つの新たな理想にまとめ上げらるべき使者として産み落された。

父アリストンと母ペリクタイオーネとは共に貴族の家柄であり、母の祖はソロンであると言ふ。プラトン自らは彼の祖父の名を襲つて、もとくアリストクレス(Aristocles)と呼ばれてゐたらしい。而して、彼のプラトンと云ふ別名は、胸幅の廣かつたか、前額が廣かつたかで、かく呼ぶに至つたのであらう。とにかくその體格の偉大さから彼の體操教師の一人が付けたと云はれてゐる。青年時代に彼はイズスミアン競技(註)に出て争つた程であり、全ギリシャ青年の嚴なる資格として兵役に就き、訓練も受け、又抒情詩も史詩も書いてゐる。この若き日の訓練のことは、『國家篇』に於いて、體操と音楽とを、身體上、精神上の教養であるとして、青年の教育に勤めた點に於いて、うなづかれるところである。

註 イズスミアンの試合はギリシャ、コリント半島に古代二年目毎に行はれた大競技を云ふ。

ソフィストに就いて教を聞いたであらうことも認められるし、又早くから、ヘラクライト(Herakleitos)やアナクサゴラス(Anaxagoras)等の哲學的文獻に接觸してゐたことも當然として認められる。

然しながら、更に彼に強く關心を向けしめたものは政治であつた。彼が人生の方向を定むべきこの若き時代に於いて、恰もアッティカがその歴史上に最も激動の時代におかれてあつた。則ち彼は、アテネ人が、あの花々しくはあつたが、やがては絶望のどん底に投げこまるべき失敗を招くに至つたシシリア遠征と云ふ冒險を企てた頃に、その少年時代を終へ、アテネの權威失墜と云ふ非運が避けがたきものとして落ちかゝつて來た頃に成人したのである。このペロポネソス戰役が、アテネ市内部に於いて演じた慘らしい鬭争を彼は親しく目撃した。生れながらの貴族なることは、彼の知識の輝きと教養の大と相俟つて、ギリシャの政治の公生涯に乗り出した。既にこの當時、彼の心には國家を救ひ、それを康きにおかんとし、全努力をあげて奮起しようとする考があつたことは、その人となりから見て當然の事であつたらう。

凡そ二十歳の時に、彼はソクラテスの熱心な學徒になつた。かの天才ソクラテスとの親しき關係は、明かにプラトンの青年時代の發展に大きい時期を劃したのであらう。彼がソクラテスに負ふ所のものは、倫理、政治的方面の意義重きことであつて、理論的學說に負ふ所は僅かであつたと見てよい。思惟するに際して、物事を辯證的に見ることゝ、概念的認識を求めてやまなかつた要求とがソクラテスの弟子プラトンに與へた理論的方面であつたらう。この概念的認識がその形而上學的意義を獲得したのも、これが學問的に使用されるに至つたのも、全くプラト

ンに依つてゐることは云ふまでもない。

三十人僭主の支配に對する嫌惡と、加ふるに三九九年に於ける彼が師の悲劇的の死に依つてこの上もなく深刻に心を打たれたことは、彼の見解にいたく影響して、哲學への愛着は遂ひに政治と彼が好んで作くつてゐた詩歌とを捨てゝしまつた。ソクラテスの死後、エウクレイデス(Eucleides)その他と連れ立つてメガラに難を避けた。こゝで彼の對話篇の幾何かゝ書かれたことであつたらう。續く數年間、彼は諸方に旅行した。確かな根據としては、キレーネ、エジプト、シシリー、南イタリー等を訪れたことが判つてゐる。餘り確かではないが、アジア、パレスチナ、バビロン、ペルシヤ等の相當遠隔な土地への旅行も考へられる。シシリーを三八九年に訪れたことは確かな記事となつてゐる。シシリーでは、彼はシラクスの潜主デオニシウス(Dionisius)一世に面接した。

西方ギリシヤの首都なるシラクスでは、既に十年餘りに亘つて、潜主デオニシウス一世は、時勢の變遷をよそに、專制政治を固守してゐた。對外政策に於いては、カルタゴ人やギリシヤ人との和解に成功し、國內に於いては互に相爭ふ諸黨派を巧みに操縱し、同時に自らの政治の輝きを示すには、藝術、學術方面を引き立たせることを怠らなかつた。故に、プラトンが、時折その著書に於いて、人間社會を正しき狀態に導くことは一に實行の力と思慮ある潜主にのみ

期待し得るとの考をもらしてゐるに依つて見るならば、彼が彼自らの理想の計畫をこのデオニシウスに依つて實現しようとの希望を抱いたことも了解される。

彼はピタゴラス學徒にして、潜主の義弟なるディオオン(Dion)を介してこの潜主に接近した。然し、その結果はうまく行かなかつた。遂ひには監禁され、奴隸に賣られるの憂目を見たが、間もなく一友人の爲めに救ひ出されて、自由民となり得た。

實際の政治への試みは挫かれた。三八六年に彼が故郷アテネに歸つた時には實際政治への望みは絶つて、もゆるが如き社會政治的理想を胸にもやしつゝも、彼の活動は専ら學說の方へ向けられた。こゝに彼はアカデミーを創立して、終生こゝで哲學に志す學生を教へ導いた。

實にその死に至る迄のかゝる教育活動は彼の眞の生活内容であつた。終生家庭を作らず、又このアテネに於いて公共生活に入ることを永遠に斷念してゐた彼にとつて、この學校は、彼の家庭及び公共生活に代るものであつた。こゝで指導を受け、後に名聲を得た學生中には、クセノクラテス、アリストテレス、リクルダス、イソクラテス、デモステネス等を擧げることが出来る。

彼の研究的態度は數學的であつて、これはピタゴラス學徒に歸すと見做れるが、後のアリストテレス學派の生物學的であると著しく對照され得る。然しながら、彼の研究範圍は多方面の

問題を含んでゐたに違ひない。『クリチアス』の中で、彼は『アツチカの地質上の歴史とそれの經濟上の結果に就いて』（それは殆んど現代的議論と同等である）（註）の記述をしてゐるが、『法律篇』に於いては、現代の著述家と雖も、比ぶるものなき程の洞察力を以つて地理的環境と文化の特性との關係を指摘してゐるのである。不幸にして、彼がアカデミーに於いてなした全講義が失はれてゐる。これは恐らく完全なる哲學體系を有してゐたに違ひないであらう。

註 Burnet: Greek Philosophy p. 223

アカデミーに於いて後進を導くことに樂しみを感じてゐた彼も、常に彼の心の中に燃えてゐたものは、政治、宗教的改革者風の衝動であつた。それは彼をして靜かなる學徒としての仕事から抜け出して、西方の舞臺に於ける新な冒險に飛び込ましめるに至つた。

彼が殆んど六十歳にもなつてゐた時、かのデオニシウス一世が三六七年に死んで、その息子デオニシウス二世が即位してゐた。プラトンは哲學者が王となる則ち哲人の王たるべき理想國家を實行し得べきことを信じてゐたと考へるべき可成りの理由がある⁽¹⁾。プラトンにとつてこの理論を實際に試みる機會がシラクスの朝廷から招きを受けたとき、到來したかの如く感ぜられたであらう。先きのディオオン（幼主にとつては叔父である）からの事急な手紙で以つて、『時は今や哲人の王の養成に奮ひ立つた』⁽²⁾と云ふことを切に勵ましてあつた。プラトンは成巧は疑

はしかつたが、哲學は單なる思索であるとの非難を救ふとして、彼の理想を行ふところの必要を感じた。而し、その企は亦失敗に歸した。デオニシウス二世は敏き學者ではないことが判り、且つ朝廷に於ける陰謀や紛議は事を面倒にさせた。四ヶ月間も僭主とディオオンとの間に争が續いて、遂にディオオンは追放されてしまつた。プラトンはその實情の望みなきを悟つて、一二ヶ月後空しくアテネへと歸つた。五ヶ年後に至つて、彼はデオニシウス二世の特別な求めに依つて、政治を援け、デオニシウスとディオオンとの間を圓滿に解決せん爲めに三度シラクスへ出かけた。この使命もまた無駄に終り、直接の危険に陥入るごときことがあつて、漸くにしてギリシャへと歸り得た。この事が所謂プラトンの書翰の第三、第四、第七に表はれてゐるが如くに、すくなくも十年間シラクスの事件に興味を續けて持つてゐたのであつた。

これ等の中絶はあつたが、これを除いてはプラトンは四十年間アカデミーに於ける教授に身を委ねてゐた。彼は三四七年に八十二歳でアテネに亡くなつた。

彼はアカデミーのより若き人々にかこまれ、愛慕されつゝ、欽仰されつゝ、言葉に於いても著述に於いても、斷るざる努力を以つて、最後まで活躍することが出来た。而してこの老聖の死は、ある結婚式上で安らかに迎へられた。(一説には書き物をしてゐる間とも云はれる)

彼の一生を顧みるとき、彼の本質を十分に發揮するを許されないので終つたのではないかと考

へられる。高遠なる道德目的は彼の魂に充ち、彼の前には、その民族の新生の理想が漂つてゐる。眞摯なる思惟の勞作の中に淨められて、彼を驅つて救済的、創造的な實行へと逼まる。然しながら、この道德的感激に充ちた創造欲には現實に政治を形成するの能力が拒まれてゐる。彼は批評に於いても、攻撃に於いても決して憚るところがない。彼は卑劣にして排斥に價すると認めたものに對しては、憎しみの力をさへ持つてゐる。而して、彼の思惟や意欲には押し通す力も缺けてはゐない。然しながら又一方に於いては、現實生活を克服して、己が意志の下に屈せしめるには、彼の理想は餘りに高く、日常の現實を超越し、彼の内的生活は餘りに微妙に氣高くあつた。彼は我が身を低うして、現實生活に入らんと試みるが、その度毎に、彼の力はそれ等に觸れて打ち碎かれる。彼は徹頭徹尾一個の政治的思想家、社會改革論者であつて、決して實際の政治家ではない。

政治上に實行せんとしては不可能であつた彼の理想は、思惟の高き輝きに於いて表はれた。彼の現實に於いてなすべく殘されてあつたものは、彼の仲間や學徒と共に、靜かな勞作に依つて認識と意圖とを培かふのであつた。かくして、いつかは、これからして彼が豫感した、人間のよりよき生活が芽生へ來るであらう。

彼の力強き生活内容がたゞに發展してやまざる教説と老年に至るも青年の如き強さを持つて

ゐた活動とを以つて開展され、且、それが藝術的に圓熟し切つた形を以つて表はれ、又この思想家にして社會論者たり、この神學者にして豫言者たる彼が、すべての民族と時代とを通じての最も偉大なる著述家の一人であつたことを思ふならば、こゝに彼の類ひ稀なる人格の像を見るのである。

第四節 『國家篇』

プラトンの如き時代に於いて、社會哲學(註)を經濟哲學或は政治哲學と區別して研究するのは最も困難とするところである。「政治的」なる語は共同生活なる社會組織の特別な方面を指示してゐるのである。現在の如き狹義に用ひてゐるのではない。それ故に、プラトンの政治的著作の中に社會哲學の萌芽を見出すべきである。バーカー(Barker)は彼の著 Greek Political Theory, Plato and his Predecessors の中にこの關係に鋭き注意を向けてゐる。

『プラトンの生涯の圓熟期なる凡そ四十歳の時に作られ、それ故、他の對話よりも十分彼の思想を表現してゐる『國家篇』は『國家』或は『正義に關して』と云ふ二重の題名を我々に認めさせるのである。かゝる二つの題名にも係はらず、これは政治學にも、法律學にも、孰れに關する論文であると假定することは出来まい。それは相方共であり、尙且つそれ以上である。人間の完全な哲學に於ける一つの試みである。先づ第一に、それは行動してゐる人間に關係してゐる

ので、それ故、道德生活、政治生活の諸問題を取扱つてゐる。然し、人間は渾一體である。人間の行動は思考を離れては了解され得ない。それ故、『國家篇』は思想を持つ人間の哲學であり思考法則の哲學である。この方面から見ると、人間の完き哲學として、『國家篇』は單一な有機的渾一體を形成してゐる。』(p. 145)

註 プラトンの社會學的思想と云ふものの、それはむしろ社會哲學と稱するが適切であらう。

ネットルシツプ (Nettleship) も亦同様に次の如く Lectures on the Republic of Plato の中で評論してゐる。

『プラトンにとつて、人間生活に就いての重要な事實の一つは、或る形式の組織社會中のみよく生活が出来ることである。これに就いては、ギリシャ人は市民社會が最善の形式であると考へてゐた。そこで彼にとつて「最善の生活とは何ぞや」と云ふ問題は、「人類社會の最善の秩序、組織は何ぞや」の問題と離れることは出来ないのである。『國家篇』の主題は非常に廣汎なものである。かく種々な問題を『國家篇』中に發見するので、現代に於ける批判は、プラトンが全然別々の問題を混同したと考へる傾きになつてゐる。然し、これはその如きではない。プラトンは『國家篇』の中で、我々に、人類の靈魂の向上と墮落、則ちその最高の發達階段への向上と、その最低深部にまでの墮落との一つの繪を與へてゐるのである。かくの如くに

して、彼は人類の靈魂に萬物を、その自然全體を考に入れようと思つた。近代的觀念から見れば、この書は明瞭に倫理的か、或は政治的かであるべきであり、また市民としての關係に於ける人間を考へるか、單に道德的行爲者としての人間を考へるか、孰れかであると期待せしめるのである。ギリシャの哲學者達はこの二つの問題を切離さずに、混してゐると屢々云はれる。然るに彼等は人類の生活を現在の我々より尙簡單で、且つ完全なものとして見てゐたと云ふのが確らしい。然し、勿論我々が倫理的、政治的と區別しなければならなく、ギリシャ人がかく區別してゐなかつたことが問題である。その理想は彼等の實際生活が我々のそれよりも、文化の程度が淺く、法律、慣習・宗教は實際は現在の如くはつきりしたものではなかつたからである。』
(pp. 5-6)

かくの如くであるからして、プラトンの獨特新思想内容に就いては政治學者、道德學者、社會學者等が各自の分野から討究の目を向けてゐるのである。これに關する文獻も亦汗牛充棟なる所以は實にこの點に存してゐる。

第五節 『國家篇』の表現形式

『國家篇』は明かにソクラテス式の方法に従つて作られてゐる。プラトンはソクラテス、グラウコンと共にピラエウスに行はれたベンデス女神の祭禮へ行つての歸途のことであつた。

友人ボレマルキユスに呼び止められ、夜の炬火競馬見物の誘ひを受け、それ迄の間をボレマルキユスの家に於いて過すことゝなつた。彼の家には既に四五の友人が(註)集まつて待ち兼ねてゐた。こゝでの對話が、この『國家篇』の一卷をなすに至つたと叙述せられてゐる。

註 ケブラロス、トラシユマキユス、アデイマントス等外數名をさす。

こゝに於ける議論の方法はソクラテスの採つたところの、知識を授けると云ふよりは、むしろ相手の思想を目ざまさすことであつた。而して、プラトンをして攻めるより、質問の方法で當時の社會生活と制度とを批判せしめたのであつた。この對話の方法は純粹に哲學的である。勿論同時代の生活經驗から推定した假定から出發して、論理的結論に導いてゐる。その材料は著者プラトンの頭の中にすべてあつた。何等事實を集めなければ、データの研究もしなかつた。故に彼が創造した社會は假定的な社會であり、心に組み立てたものであつた。

ソクラテスをして、その篇の主要人物たらしめてゐることは他の對話篇と同様である。その談話はこの人に依つて導き進められ、その結論も亦この人の口から出されることにしてゐる。

プラトンの著書全體に亘つて『辯明』を除外例として(悉くこの對話の形式をとつてある。しかしながら、この叙述方法はプラトンのみが用ひたのではなくて、當時廣く行はれてゐた藝術上の技巧形式を採用したのであつたらう。たゞ、その形式をとることが、一層ソクラテ斯的教授

法に合致した所以ともなつたのであらう。

プラトンがこの畢生の力作『國家篇』は、最初から全體に亘つての一貫した構圖の下に筆をとつたのではなかつたであらう。その個々の部分は可成り時間的に隔りがあつて、その部分々々は著者のそれ／＼の時代に於ける發展段階の特徴を示してゐる。然しながら形式的には統一されてゐるのである。この書は大體三部分から成立してゐると考へられる。

(a) 『國家篇』第一卷は、正義に關する對話に就いて始まる。この對話は事實何等解答を與へてはゐないが、效果に富む推論で進行してゐる。第二卷の前半に至つては、ソクラテスの話し相手が代はる中に、移り行きとして、不正を賞讃するソフィスト的の演説となつてゐる。

(b) 第二卷の半ばにては、ソクラテスは更に新な人々と共に理想國家の制度に關して對話を始める。この問答は第四卷の終りまで續いてゐる。これ等の哲學的背景をなすものは、彼のイデアの世界と現象の世界との間に靈魂の位地に關しての説である。そして、これと同一のことが、本質上同じ立場であるところのこの『國家篇』の八卷より十卷に至る最後の三卷にも通用し得る。これ等の卷では先づ國家制度に關する誤れる四形式と、それに相應して個人の性格をなしてゐる型が見事に發展しており、次いでこの著書の結論として、『正義』の價值を論じてゐる。

(c) 第五卷から第七卷までは、明かに後からの追加と考へられ、理想國家の制度の個々の要素を説いて、殊に、婦人共有を以つて始まつてゐる。而して、形而上學的にこゝでの説は色付けられてゐるのを我々は見出す。

かく大別して考へると、我々はこの『國家篇』が數十年の永きに互つて著作されたものでありこの哲學者の思想發展のあらゆる段階を経過してゐるものと考へなくてはならない。

第六節 正義並びに理想國家論

『國家篇』の卷頭を飾るところのものは、前にも述べし如く、『正義』に關する論である。正義の性質に關する、或は正義の存してゐるところの性質に關する種々な一般の見解は次の如く考へられてゐる。則ち、ケファロスの見解では、『眞實を語り、負債を拂ふ』⁽¹⁾ことであり、ポレマルキウスのは、『友には善を、敵には惡を與へるの術』⁽²⁾であり、トラシユマキウスのは、『力は正義なり、正義は強者の利益なり』⁽³⁾と、グラウコーンのでは『法律に依つて命ぜられる所のもの』⁽⁴⁾である。

註 1 'The Republic, p. 331. (この引用頁は Jowett の英譯版に従ふ。以下同じ)

2 'Ibid., p. 332

3 'Ibid., p. 338

4 'Ibid., p. 359

プラトンはこれ等すべての定義に對して異議を唱へてゐる。彼等各々がその見解を異にしてゐるとは云へ、すべてが、正義を完成したもの、則ち世俗の、表面の、法律上のものと見做してゐる點では等しい。プラトンはそれ等人爲的な解釋に反對してゐる。彼は、正義は内面的のもの、自然或は人間の靈魂中のものと見てゐる。それは偶然の習俗にも依らなければ、法律上の制定にも依つてゐない。思考の習慣であり、生活の方法であり、意志の發表である。かゝるものを定義するのは難しい。評述する方がましである。靈魂の性質であると共に、その現はれは社會秩序である。

そこで、正義は人間の内的生活の性質であるから、また内的生活は客觀的形式に表はれる場合のみ研究することが出来るから、人間の行動を、個人も集團も共にして考へるを要する。尙且つ、社會は個人よりも大で、正義はこゝでは「大文字」で織り込まれてゐるから、先づ第一にこの社會形式を研究するのが最善である。何故かと云ふに、國家、則ち社會構成は樫や岩で出来てゐるのではなく、それ等を組み立てゝゐる人間性から出来てゐるからである(註)。

註 The Republic, p. 544 參照

この目的を達せんが爲めに、プラトンは國家を假定的に創る考を目論む。彼は云ふ『創造の過程にある國家を想像して考へる。すると、又創造の過程にある國家の正義不正義を見るであ

らう。』⁽¹⁾それ故人類社會の研究に於いて、プラトンは純粹に哲學的方法を求めてゐる。彼は社會の起源、發達を歴史的順序でなく、論理的順序で考へる。『眞の創造者は必要であつて、このものこそ、我々の發明の母である。』⁽²⁾

註 1 'The Republic, p. 369

2 'Ibid, p. 369

國家則ち組織された社會は『私の考では、人類の必要から起つて來る。何人も自己一人で足りてゐるものではないが、我々のすべては多くの要求を持つてゐる。國家の起源に關して、外
の理由を想像出來る何ものかあるか』⁽¹⁾最も基礎的方面では、これ等の要求は食物、住居、
衣服等の物質的のものである。これ等を最もよく作るのは分業に依つてゐる。と云ふのは、
『我々は皆が同一ではない。我々の中には種々な性質があつて、それ等が色々の職業に適應し
てゐる』からである。かくして『人は自分に無理でない一事を、然も丁度よい折にして、其他
の事を他人に委すならば、萬物は一層多く、容易く、性質のよいものが出來るのである。』⁽²⁾適
當な調和によるよい結果が産業の擴大を來すのである。新しい要求がそれからそれへと出て來
而もそれが充されるに違ひなくなる。技術家、農夫、牧者、貿易業者、商人、銀行家、水夫、
賃銀勞働者等が要求せられる様になる。⁽³⁾これ等がすべて『一つの住處に集まつた時、この住

人の團體を國家と稱する。』⁽⁴⁾

註 1 'The Republic, p. 369

2 'Ibid., p. 370

3 'Ibid., P. 371 參照

4 'Ibid., p. 369.

正義はここに『これ等の市民と相互が取引する點に』⁽¹⁾表はれてゐる。それは個人が生れながら、ささげるに最も適してゐるものを社會全體に貢獻することに存し、これ等の才能が社會結合に至らしめる本來の關係に存してゐる。』私の意見では、國家の眞の健全なる構成は私が今述べたところのものである。』⁽²⁾

註 1 'The Republic p. 372

2 'Ibid., p. 372

然し、發展はこの儘ではゐない。』私は多くの人々が簡單な生活方法では満足しないであらうと考へてゐるからだ。……今や、都市は何等自然の需要に要求せられない多くの職業で充たれ、増大するのである。』⁽¹⁾食物、衣服、家、家具等の奢侈は職業の細別されるに従つて伴つて来る。遊獵者、藝術家、音樂家、俳優、舞踊家、家庭教師、理髮師、髮結、料理番、菓子屋、給仕等の職業等が出來て来る。この膨脹につれて、不正義が入り来る可能性があり、國家の發

展の可能性がある、必要の限度を越えようと、國家はその國境を擴げ、大きくするのが必要となるであらう。

『そして、原住民を支へるに十分であつた國土は今や余りに小さく十分ではなくなるであらう。そこで、我々にとつて牧場や耕作地を得るが爲めに、隣國の土地を削りたくなり、隣國でも、同様に必要の限度を越えて、無限にその富を蓄積しようとする、我々の國の土地を削ぎたくなる。そうなるは戦争となるのである。尙ほ、戦争は善をなすか、將た惡をなすかはここに措き、とにかく戦争は公私共に、國家に於ける殆んどすべての惡の原因となるべき原因から出たと云ふことが判つたと斷言し得る。……そして、我が國家は再び膨脹しなければならぬ。そして、この時、この膨脹は全く出ては外國を攻め、入つては侵入者と戦つて、我々の所有も守り、上述の如き人及び物品を守らねばならない。軍隊のおかげと云へるのである。』⁽²⁾

註 1、The Republic, p. 373

2、Ibid., p. 373-4

さて、各人は生れつき適してゐる技術の一つのみを習得することが出来るから、従つて『戦争をする』と云ふことも一つの技術である』から、この事も分業の原理に従つて、専門的に習得されなければならない。『若し我々が出来ることならば、都市を護るに適した性質のものを選ぶ』

のが義務であらう』⁽¹⁾ プラトンは、戦争の一原因として、國民的侵略の可能を認めてゐるが、それを一つの徳とは見做さないで、直ちに道徳的必要としての防禦論に移つてゐる。

彼等の仕事に應じてゐる性質が選擇の場合の根本になるに違ひない。彼等は『見るにすばやく、若し、その敵を見た時に、これを追及するに敏速で、尙ほ敵を捕へたときに、戦はなければならぬ時には、強く』あるべきである。亦『よく戦ふからには勇敢であるべきである。』就中『その精神は意氣に充ちてゐるべきである。……が然し、これ等の意氣ある性質は、お互に、また其他の人々に禮を知らない様に思はれないか？』そこで、今一つの要素たる友達に對して溫和であれと云ふことが要せられるのである。外見はお互に包括的である様なこれ等の性質は、實際に於いては番犬に見出されるところのものであるが、又人間の間にも見出される。兇暴が『意氣』から出る如く、溫和は『理性』則ち『哲學』から出るのである。⁽²⁾

註 1、The Republic, p. 374

2、Ibid., p. 374

ここに於いて、我々はプラトンに今迄のギリシヤ思想を超越した一大思想を發見することが出来る。軍人階級を認めた點である。かのペロポンネソス戦争の時に於いてすら、ギリシヤ人はこの軍人階級と云ふことは考へ付かなかつた。ただ市民權を有する者が各都市國家に於いて

兵役義務を負はされてをり、そして軍隊教育が國家制度中の本質的要素の一つであつた。コリント戦役（紀元前三九四年—三八七年）以後に、アテネの將軍イフクラテスに依つて傭兵の編成が出来た。この事情に關しては、當時市民生活が富裕になつた結果、國家意識、愛國心が衰へ、これが爲めに、兵役義務に服することの代りに、金を以つて、これに代へることが行はれ出したのであつたからである。エバミノンダスの如き人も、かゝる傭兵を集めて常備軍を編成するに至つたのである。そこでこの新しい軍隊制度をプラトンは理想國家の中に組み入れたのである。然し、この階級は最も善き市民から成るべきで、彼等は他のすべての職業上の勞働から免除されて、その都市國家存立の上の危險を防禦する義務がある。故に、選ばれて、この階級に屬せる者は、外敵に對するのみならず、國家の内亂變亂に際しても、國家を康きにおき、國內の秩序規律の維持に努めるべきである。それ故に、この階級の人々を護國者とプラトンは呼んでゐる。

この護國者の階級に屬せる者は、有能なる軍人としての一切の資質を有すると共に、國家の目的、共同生活の内部諸關係に就いての理解を持たねばならない。そこで、これ等護國者階級の中にも、初めて護國者としての教養訓育を受けつゝある者と、これを指導しつゝある者との間の區別が生じなければならない。この關係は老人と青年とに割り當てられ、國家の第一線に

立つ青年と、既に最高の認識を獲得し、それに従つて、國家を統治する老人とに別けられる。プラトンは、これ等を『補助者』則ち官吏と、『支配者』則ち執政官とに區別する、而して、この支配者たり得るものは、學の人たる哲學者達に外ならざるは云ふまでもないことであり、知識と能力と、加ふるに國家に對する特別な關係からして選ばれる。(1)

かゝる組織を國家は必要とする。前述の如く、國家をば各人の自然の要求を出来るだけ十分に満足させるどころの一種の結合と見たプラトンのそれが、自然主義的、功利主義的基礎に立つてゐたにしても、人間の集團生活は、かくの如く、遂ひにはその階級的組織を経験しなければならぬのであらう。

完全な國家に於ける市民の組織と類別とは今や完全である。諸階級の相對的價值と、それ等階級の重んぜられることに關しては、プラトンは金屬から成つてゐると云ふ比喻を用ひてゐる『我々はこの話の中で、人々に云ふべきである。市民よ、お前達は同胞であるが、神様はお前達を別々に造りはめたのである。お前達の中のある者は命令する力を持ち、神は黄金を混ぜてこれを作り、それが爲めに、亦最大の名譽を得てゐるのである。他の者は神様が銀から作り、補助者とさせる。亦他の者は農夫、職人で、神様は眞鍮、鐵から作り、それ等の種族は子供を生んで存續して行くのである。』(2)

註 1、The Republic, pp. 412-14 参照

2、Ibid., p. 415

この類別は色々の形に出来てゐて、銀の息子が黄金の両親から生れるべきであると云ふきまりに依り、又はその反對に、両親達が、もとの地位の置き換へられるきまりに依つて、各人はその固有の標準を見付けることが出来るのである。そこに發展があるのであつて、かくして、人類進化の可能性は保たれ、正義が維持されるのである。この『地位の置き換へられること』をジョエット Jowett は『非ギリシヤ的で、彼の時代に存してゐた何ものとも異つてゐたから、プラトンの最も顯著な概念の一つ』(註)と見てゐる。

註 Introduction to the Republic, The Dialogues of Plato, Vol. I. p. iii

以上に敘述せるところに依つて、我々は國家が自然に、三階級に區別されてゐることが判る。則ち、生産階級と防禦階級と支配階級とである。生産階級はそれぞれその熟練せるところに従つて、すべての財を生産し、加工する人々の大多數の集團であり、これが共同生活の外的要素を成すもので、農夫、職人等を主とし、これに商人をも加へたものである。防禦階級は現役の軍人及び官吏から成る、先きの所謂『補助者』の階級である。支配階級を成すものは哲學者達であり、彼等は眞の善を認識し、その認識に依つて法律を設定し、『補助者』を教育し、國家全體

を統制するのである。

この市民を三階級に分けたことは、社會發生の論理的階段たる經濟的、軍國的、政治的に一致してゐる。そして、プラトンはこゝに彼の倫理的、神學的なる心理學を持ち出して來た。國家は人間を大きくした様なものである。市民の三階級は靈魂の三作用なる理性、意氣、慾に對應する。生産階級は利得を目當とする勞働を以つて、その職とするが故に、人間靈魂中の『慾』に對應する。これは富を愛する者の階級であつて、この『慾』に依つて經濟組織は進化發展するのである。防禦階級は、本質上、軍事に従ふをその任務とするからして、『意氣』に對應する。

これは名譽を愛する武士道の氣持である。然るに、支配階級は智を愛する者である故、『理性』に對應する。この『理性』に依つて、社會統制が發達し、結合と連帶とが出来得るのである。(註)

註 The Republic, pp. 437-445 參照

ここに、彼の目的論的世界觀は、これ等の階級に夫々定められたる本分があり、この本分を盡す程度に従つて、各々は善であり、完全であるとの規範に導いてゐる。

それ故に、プラトンの國家は、これ等三階級が、夫々それ自らのことをなすの論理的協同であり、それらの本質を通して、望まれた社會秩序が、國家の完全をなすのである。

そこで、社會秩序は、人間靈魂のそれぞれの性質が眞に發現を見たとくろを通して、論理的

に構成せられたものである。正義は完全な調和である。不正義は靈魂の種々な要素間の『世話焼き、干渉を起した争』であり、『靈魂の一部分が全體に對して刃向ふ事である。……かゝる混同、誤解は不正義、不節制、卑怯無智、及び各形式の惡徳を除いて、他に何があり得るか？』(註)

註 The Republic, p. 444.

個人的意味に於ける正義の概念を明瞭ならしめるものは、綜合的に見たこの正義の議論中にある。正義は一つの關係である。正義を究極にまで分析して見るならば、それは社會を構成せる個人中に宿つてゐて、二つの見解がある。一つは、正義は個人の秀いでた才能、或は特殊な氣質の點で、その團體の成員と調和して關係する働きから生ずるとする。今一つは、正義は個人の心中にある慾、意氣、智の要素が調和した全體となつた場合に表はれるとする。

バーカー Barker はプラトンのこの正義論に關して次の如く批評を下してゐる。『プラトンの正義は……法律上の事項ではなく、法律上の權利、義務の表面上の組織と何等關係してゐない。……それは法律の一事項でも、個人倫理でもなく、兩者の混合でもない。それは社會道德の概念であり、法律にも劣らざる、恐らく法律以上に、社會關係を處置する基となる社會倫理法則の定義である。正義は社會全體が善に達し、それに依つて幸福となる方法を取扱つてゐる

る。……その形式は社會道德の實質が、「私の地位とその義務」を果す點にあるのである。而して、これが現代思想家が尙ほ用ひてゐる形式である。この形式の背後に、又社會道德の全體概念の背後に、道德體則ち有機體としての社會概念があり、各個人が一つの機關であり、又一つの機能を持つてゐる點に於いて、道德生活があるのである。……彼は、特殊の機能を果す道德義務に基づける倫理的社會の概念から出發して、人々がその義務を果すを勵ましてくれる意氣として正義を考へてゐる。』(註)

註 Op. cit., p. 179

更に經濟的、軍事的、政治的見地に立てるこの社會組織中にあつて、プラトンの社會哲學を構成せるところの二論題がある。プラトンの教育制度と、共產主義論とである。

第七節 教育論

正義は社會秩序の根本となつてゐるからには、社會は社會全體の發展が依存せる活動力をうまく活かさんが爲めに、個人の訓練に規定を設けるのは最も必要なことである。そこで、この原則を市民全般に適用すべきであるが、それに當つては、プラトンの説に明かな缺陷を認める。それは經濟的集團なる生産階級にも等しく適用すべきであるのに、彼の議論に至つては、唯護國者の訓練のみに適用されると認めるが確であらう。

彼等の身體、精神兩者の性質の根柢から考へて、彼等の功率を高める爲めに、如何なる訓練がほどこされるべきか？ その答はこうである。『傳統的のものとしては、身體の爲めに體育、精神の爲めに音樂である。』(註) 青年時代はその性格を形成し、思ふままの印象を容易く得られる時期であるから、音樂が先づ教育せられるべきである。音樂と云ふも、單に音樂そのもののみならず、文學、小説、詩、戯曲、美術等を含む總稱である。

註 The Republic, p. 376.

この教育論は第二卷に始まり、後章に於いて詳細に互つてゐる。教育の職分は、事實を記憶させると云ふことよりも、身心相調和して發達せしむることである。青年には適當な感化を與へなければならぬとして、次の事實に反對を彼は表明してゐる。『我々が子供に語るに、全然眞實が缺けてゐるのではないが、大體に於いて、作りごとである物語で始める……我々は不注意にも、適當ならざる人に依つて作られた、出任せの物語を子供に聞かせて頓着せず、また子供が成人した時に、我々が子供に持たしめようとする觀念とは大部分非常に反對するものを子供の心の中に受け入れさせて頓着しない。……それ故、最初には、物語作家の檢閲制を立てるべきである。』(1)

先づ第一に、神學を削正しなければならない。虚事^{ソラゴト}、欺慥、裏切り等の見苦しい行爲を織り

込んだ物語は嚴しく省かなければならない。『神は萬物の創造者に非ずして、善のみの創造者である。詩に影響されて、これ等神話の悪い話で以つて、子供を怖がらせる母を持つてはならないし、……子供に臆病を起させない様、また、同時に、神に對して冒瀆の言をなさない様に母をして注意せしめるのである。』⁽²⁾すべて、虚事、贈賄、瞞着の物語、己の女々しきことを示す慨歎等も、又、愚な心を表す哄笑することも、不正の人々の幸福であることも、削除されなければならぬ。眞實、名聲、忠義、高遠な理想追求の原則を諄々として説くことのみが保たれるのである。かゝるものが『自由であることを思ひ、死より奴隸たることを恐れる少年及び大人』の教育である。⁽³⁾

註 1、The Republic, P. 377

2、Ibid, P. 380-81

3、Ibid, p. 387

同一原則が、音樂、藝術に關しても行はれてゐる。音樂の職分は、娛樂でなくて『勇氣と調和の生活』に於ける靈感である。⁽⁴⁾又『同様な管理は外の藝術家にも及ぼし、彼等も亦善に反した惡德、不節制、卑劣、卑猥の形式を彫刻、建築、及び其他の創作藝術に表はすことを禁じられるのである。……我々は我々の護國者が、道德的畸形の形象中に成長するを願はない。それは丁度、有害な牧場にあつて、日々少しづつ、有毒な草や花を食べて、遂に、識らず知ら

す、己の魂に腐敗のかたまりが蓄積するのを欲せざると同じである。我々の藝術家は、寧ろ美麗と上品との眞の性質を識別する才能のあるべきである。そうであれば、我々の青年は、健康の土地に、美しい眺め、音楽の中に住まつて、萬事に善を受くるであらう。よき作品から流れ出づる美は、純潔な土地から吹き来る健康を與へるそよ風の如くに、人の耳目に流れ込み、幼き時代から、識らず識らずの間に、その魂が、理性の美はしさと似て、また、それに同情するものに導いて行くであらう。』⁽²⁾

註 1、The Republic p. 399.

2、Ibid, p. 401.

尙彼は、萬物に互つての中庸、節制、自制を説く、快樂は理性に依つて抑へ、五官を満足せしめることから得ないで、忠實に實行した義務意識から得られるべきである。

心的訓練に伴ふ體育は、體操と云ふ術語で一括され得る。それは音楽と同様に生涯を通じて繼續すべきである。音楽の足らざるを補ふものである。音楽に専心することは『溫順、優懦、柔弱』の結果を來すが、體操のみでは又『堅固、兇猛』に傾き過ぎるであらう。適當に權衡を保ち得るならば、『穩かで、又勇ましい』調和した魂を作り出すであらう。

第一に要求せらるべきことは、酒に酔ふことを慎むべきである。『護國者は市民中で、酔ふに

も最後まで踏みどごまり、又、世界中、己が何處にあるかを知らなくなるにも、最後のものがあるべきである。……護國者が己が身を注意するが爲めには、他の護國者を要するとは實に滑稽である。』⁽¹⁾

通例の體育訓練は不適當で、寧ろ危險である。』それはただ眠を催す如き種類のもので、寧ろ健康に危險である。』戰士の運動は神速たらしめなければならぬ。訓練表も必要である。市民の戰士は『飲料水、食物、夏の暑さ、冬の寒さ等の種々の變化中にあつて、戦争の場合に、これに耐えなければならぬ、健康をこわし易い様であつてはならない。』魚を止め、焼肉を用ひ美味なソースは云ふ迄もなく使つてゐない。』シラクス流の食事』シシリア流の料理』コリントスの娼婦』及び『アテネ流の菓子』⁽²⁾等は特に禁せられてゐる。プラトン健康の規定を定める以外には、醫者を余り必要としてゐない。弱者、片輪者に關しては、自分等の仕事に適せるものを選ぶことにするので、自然淘汰の力を持つ方がよいと考へる。⁽³⁾ 體育訓練の極く細い點に關しては、彼は單に次の如く附加してゐる。』更に進んで、市民の舞蹈、狩獵、驅逐、體操及び馬術の競争に就いて詳論するの要が何處にあるか。そのわけは、これ等はすべて一般原則に従ひ、それを發見した上はその法則を發見する困難はないのであるから。』⁽⁴⁾

註 1. The Republic p. 403

2. Ibid, P. 404

3. Ibid, p. 410.

4. Ibid, p. 412.

第七卷に於いても、亦、『法律篇』に於いても、プラトンは更に教育制度の枝葉に互つて論じてゐる。然しながら、最高型の市民資格を修得させたい爲めに訓練すると云ふ彼の目的は變らない。『眞の教育はそれが何んであらうとも、相互の間、及び彼等の保護の下にある者との關係上、彼等を教化し、仁慈ならしめる最大傾向を持つてゐるのである。』(註)

註 The Republic, P. 416

この教育論に關する批評は Parker の前掲書中の記述に依つて盡されてゐる。

『かくして、教育論に置かれた強みは、プラトンの正義に關する概念の論理的歸結である。

若し、正義が、社會を結合せしめる社會倫理の原則であるならば、又、それが、社會の各成員に依つて、特殊の職分を適當に行ふ點に存するならば、社會はそれ自身の結合の爲めには、社會の成員に社會自身の原則を十分浸み込ませなければならないし、社會自身の優越の爲めにはその成員に彼等の職分を行ふに當つて優れる様に訓練しなければならない。プラトンの考のみならず、一般にギリシヤ人の考に於いても亦、教育は一つの社會過程と見做され、この社會過程に依つて、社會の一つ一つが社會意識を持てる本能となり、全ての社會欲求を充す様になつ

て来る。……プラトンはアリストテレスと一致しており、兩者は共に國家の教育職分の第一位を主張するギリシヤ人の傳統に忠實である。……『國家篇』は政治上の構成問題に觸れずして、教育方法の問題に觸れてゐる。そして、事實、プラトンが暗示した唯一の政治組織——哲學者の王の支配——は眞に、彼の教育理論のあらわれであり、結果である。』(註)

註 Barker, op. cit., pp. 181-2.

第八節 共產主義論

最大幸福の状態なる正義を獲得する爲めには、プラトンは、新しき教育組織の樹立を必要としたのみならず、それと等しく、經濟上、社會上の構成を改造する必要を認めてゐる。然し、『單に彼等の教育のみならず、彼等の住居、及び彼等に屬する一切の物は、護國者としての彼等の徳を傷けたり、又は彼等を誘惑して、他の市民を食ひ物にする様なことがあつてはならない。』(1)亦『若し、我が市民が善く教育され、成長して、分別のある人となれば、彼等はすべてこれ等の事物に依つて、亦私がこゝに省略した其他の事物に依つて、容易にその道が判るであらう。例へば、結婚、女子所有、子供の生殖等の如きは、皆格言の云ふ「友は萬物を共有する」と云ふ一般原則から推すことが出来る。』(2)

註 The Republic, p. 416.

c, Ibid., p. 423.

(a)、財産の共有

プラトンは貧富の兩極端を以つて社會威嚇と見做す。『富は奢侈と懶惰との兩親であり、貧は卑劣と不徳の兩親である。そして、兩者共に不満足の兩親である。』(註) 貪者は相當に準備して自ら訓練することが出来ない。自己の仕事に勤勉たり得ない。富者は無限の富を所有するに至れば、最早勤勉たり得ない。そこで、支配階級たるものは、適當に彼等の社會上の職分を行ふ爲めに、經濟上の關係から免がなければならない。共產的支配のみが、それ相應の環境を與へることが出来る。

註 The Republic, p. 422.

『そこで、若し、護國者に關しての我々の理想を實現するならば、彼等の生活方法は如何にしたならばよいかを考へて見る。先づ第一に絶対に必要である以上に出て、自己の財産を持つべきではない。又、入らうとする者がある場合に、拒んで閉ぢてしまふ様な私有の家屋や倉庫があるべきではない。彼等の食料は、節制と勇氣の人たる訓練された戰士の要求する如きものであるべく、彼等は市民より一定額の支拂を受けることを承知して、その額は一年の費用を満すに足るだけで、それ以上ではいけない。彼等は陣地に於ける兵士の如く、食事を共にし、

一緒に生活すべきであらう。我々が彼等に語る金や銀は神から受けたもので、神聖なる金屬が彼等の中にあり、そして、それ故に、人々の間に流通してゐる不純物を必要としなく、かゝる地上の混交物に依つて、神聖なるものを汚すべきではない。と云ふのは世間普通の金屬は多くの不淨行爲の源であるから。然し、彼等自身は汚れないのである。一切の市民中、この護國者のみ金銀に觸れたり、これを扱つたりし、或は、これを同一の屋根の下におき、或はこれを身につけ、或は金銀の器物から飲食を許さないのである。そして、かくすることが彼等を救ふので彼等は國民の救済者となる。然しながら若し彼等が自身の家屋、或は土地、或は金錢を得る様なことがあれば、彼等は護國者ではなく、家屋監督人となり、或は百姓となり、又他市民の同盟者ではなくて、敵となり、暴君となり、嫌ひ、嫌はれ、陰謀を企て、企てられ、かくて、彼等は外敵よりも内敵を非常に恐れて、一生涯を過すであらうし、自己及び其他の國家の者も共に、滅亡の時が手近に迫るであらう。すべて、かゝる理由からして、國家はかく支配されなければならなく、護國者の家屋及び其他一切の事物に關して、護國者の爲めに我々が制定した規則であると云ふことは出来ないか。』(註)

註 The Republic, pp. 415-17.

體育訓練の形式に於けると同様に、プラトンはその經濟的共產主義を、枝葉に互る必要がな

い程に明白なことゝ見てゐる。然しながら、最近に於ける共產主義の理論の見地から立つて、若干の考察を試みるならば、眞の意味に於ける共產主義とは正反對なる一個の國家形式であるとせられるであらう。

第一に、こゝに主張された共產主義は個人の犠牲に及んでゐない。支配階級が私有財産及び後節に説くが如くに、自己の家族を有するを許されざることは、これ等の關係から起る私的の累しさを除去し、彼等をして何等の妨げなく、各自の職分に忠實にさせることが出来るといふ以外に、何等理由はない。己の特殊の才能を働かすに當つて、何等拘束されないが爲である。個人が、自己の贏ち得るものを犠牲にするのが、共產主義の理論上當然起るべきであるに、プラトンの思想に於いては、個人を犠牲にはしない。むしろ、個人が自己の仕事によりよく適ふ爲めの教育の一部分である。目的にあらずして、教育上の手段である。

第二に、この説は、經濟學と政治學とを分離せしめる一計畫である。經濟勢力と政治的發展とが一致することは、常に、經濟的利益の爲めに、政治的に發展せしめ過ぎ、それが國家の腐敗を來すものと見てゐる。これは、正義の支配する理想状態から漸次惡化して偽りの制度及び性格の形成されて行く發展形式を叙せる『國家篇』第八卷及び第九卷に見られるところで、こゝは、彼の著作中の最も生氣ある箇所の一つとせられてゐる。この發展の中に名譽心、權勢慾

所有慾等が除々に入り來つて、終に慾望の世界が擴げられ、こゝに忌はしき利己主義が生じる。かくして、プラトンの理想國家制度たる貴族政治アリстокラシーは、財力政治チモクラシーに、そこから寡頭政治オリガルキーに、更に民主政治デモクラシーに、遂ひには僭主政治チラニーに至る。かく解釋する彼に於いては、近世に於ける共產主義論とは餘程の相違を認めなければならない。

第三に、彼の目的は常に唯物的經濟的であるよりも道德的政治的である。彼の論は社會の經濟組織を何等攪亂しない。プロレタリアの闘争に依つて實現の可能があるのではなく、少數なる護國者團にのみ適用するのである。云はゞ、貴族的共產主義であつて、全市民の凡そ九十五パーセントの人々を除外して、唯々僅かなる支配階級をして、知識追求に依る諸機能の利益を共同的に享受するが如き國家を以つて、彼の理想國家としたのであつた。生産階級に對しては、支配階級と同等に、地上の善きものを享受し得る權利を斷念せしめられてゐるのである。私有財産及び家族は現狀の儘で、これ等は利得の爲めの勞働が重要な動因となるからである。故に彼の理想國家は、排他的な、精神的貴族政治の模範的なものと見て差支なからう。到底完成された國家的共產主義の典型とは認められないのである。

b、妻子の共有

各個人が自己の生れながらの才に應じて、完全に國家に對して、自己の義務を果すことを要

求するのが正義の根本原理である。そこで、こゝに婦人の社會身分論にも觸れないわけには行かない。プラトンは、この問題の複雑なると、又、この歸結が今迄の風習から見ると妙に感ぜられるので、躊躇の色はあつたようであるが、遂ひにこの論を相當の點まで發展させてゐる。(註)

註 Book V. 參照

先づ原則としては、男女兩性を平等に視ることである。婦人は既に自己に適した仕事を割りあてられ訓育を受けなければならない。ギリシャの婦人が、世間的に交際しないことは破らなければならない。公務も男性に専有のものではなくなるのである。男子と婦人との唯一の相違點は『強さと弱さとの相違』である。そこで婦人は、體育に於いても、音樂教育に於いても、男子同様に教育に與かるべきである。護國者の性質を有する婦人は、矢張りその階級に屬せしめられる。』そこで護國者に屬する婦人をして、その着物を脱がせ、徳を以つて、その法衣とするそして、兵役に服せしめ、自國の防禦に當らしめる。たゞ、勞働の割り當て方は、婦人は男子と比べて、弱い質であるから、婦人には軽いものを割り當てゐるが、其他の點に至つては、義務は男子と同じである。』(註)

註 The Republic, p. 457.

こゝで、二つの問題が起つて来る。一つは人性改良に關する優生學的問題で、今一つは、財

産及び家族の私有制を避けんとする道德問題である。この解決は彼の共產主義にのみ見出されるのである。

『護國者に屬する婦人は共有であるべく、それ等の子女も亦共有であるべく、如何なる親も我が子を知らず、如何なる子供もその親を知らざるべきである。』(1)『彼等の立法者は、男子を選擧した上は、今や女子を選んで、男子に與へるのである。——女子は出来るだけ男子と同様の性質でなければならなく、共に共同の家屋に住し、共同の食事をなさなければならぬ。どれもこれも、特に男のもの、女のものど云ふものはなく、男女は共同であるべく、同棲すべく、體操の練習を一緒にするであらう。かくして、彼等の性の必然に依つて、お互が交接する爲めに引き合ふであらう。』(2)

『そして、これは其他の事物と同様に秩序ある風で行はなければならなく、幸福國家に於いては、放縱は支配者の禁ずる、神聖ならざるものである。……そこで、次ぎに、はつきりと、結婚式を最高の程度に於いて神聖ならしめるのであつて、また、最も有益なことが神聖であると考えられるのである。』(3)

これは次の様な手配をする事に依つて行はれる。即ち『一定の祭日を設け、その祭日に新郎新婦を相會合せしめ、供物を捧げ、相應しき結婚の歌が詩人に依つて作られる。婚姻者の數

に至つては支配者の裁斷に任かさなければならぬ事柄で、これの目的は人口の平均を保たんとするが爲である。また支配者が考慮しなければならぬ多くのことがある。例へば、戦争、疾病及びそれと相似た作用に依つての影響などで、出来る限り、國家をして、餘りに大ならしめたり、或は小ならしめたりすることのない様にしなければならない。……勇敢にして善良なる青年は、其他の名譽及び報酬に加ふるに、婦人と交接するの偉大なる便宜を得させたく、これ、彼等が勇敢なるが故であり、かゝる父は、出来る限り多くの子供を産むべきであると思ふ。』⁽⁴⁾

『これ等正しき結婚に依つて生れた子供は國家に依つて育てられ、母に依つて撫育される。いつれの母でも、自分の子供であると認められない様に出来るだけの注意を拂ひ、そして乳母と附添者などに依つて、特に仕事に堪へさせる。神聖ならざる結婚に依つて生れた子供は、完全ならざる結婚の場合と共に『暗黒と性的情慾の子供である』と見做されるであらうし、又『行義正しきは尊敬される』の傾きもあり、然らざれば、すくなくとも、國家の爲めに育てないであらう。』⁽⁵⁾

註 1 'The Republic, p. 457.

2 'Ibid., p. 458.

3. Ibid., p. 458.

4. Ibid., p. 460.

5. Ibid., pp. 460-61 參照

この共產主義的に取扱ふことが、優生學の問題を解決し『護國者に屬するものが、純潔を保たんとするならば、かくある様に要求されるであらう』これは更に進んで『國家を崩壊せしめる私的感情』を除く結果となる。……

『財産及び家族の共有は、彼等をして尙一層眞に護國者とさせる様になる。彼等は「自分のものだ」とか「自分のものでない」とかに關して意見の相違することに依つて、都市を分離せしめないであらうし、各人はその得たる物を自分の家にそれ〴〵曳き込み、そこでは別々の妻子別々の快苦を有する様なことをしなく、出来る限り全部が同一の快苦を感じるであらう。これは彼等が近くにゐるもの、親しきものに關して、すべて同一の意見を持ち、そして、それに依つて、すべてが共通の目的に向はんとするからである。』(註)

註 The Republic, p. 464.

プラトンのこの家族共產主義は、彼の前述の如き經濟的共產主義と同様、現代の主張とは根本的に違つてゐる。護國者中での、家族的共產主義は、自由戀愛論とは相背反せる最も嚴格な

る取締の一つである、種族本來の性質の爲めに、また社會最高の倫理的利害關係の爲めに、彼等の年齢、生理的心的性質からして、両親たるに最も適してゐて、科學的原則に於いて、又、國家の嚴格なる統制の下に結婚するのである。

プラトンは、人間の共同生活を全然新なる基礎の上に打ち立てんとして、その計畫を根本的に思ひ切つて表はすに際しての誤解の多きを認めながらも、その論理的發展を究極まで追ひつめて行つたのであつた。アリストテレスが指摘せる如く、(註)彼の歸結は誤まつてゐるかもしれないが、然し、彼の目的に忠實なると、彼の倫理的理想主義とは疑ふを得まい。

註 The Politics, Book II. 參照

第九節 『法律篇』

『法律篇』はプラトンの最後の著作であり、八十歳頃に書かれて、未完成の儘で遺されたらしい。論旨の發展に何等系統的の秩序を認めることが困難である程、所々に於いて途切れてゐる點が多い。この書は、遺稿の中から發見され、フィリッポスなる弟子に依つて、つぎ合はされた種々の草案が彼の歿年なる紀元前三四七年頃に出版されたと考へられる。それ故、長年、彼の作であるか否かと決定し難かつたものである。

この著作は、彼の社會理論に關して補足的説明を加へてゐるので、我々にとつて大いに興味

多いわけである。『國家篇』程、哲學的でなく、經驗知識で纏められたのである。こゝでは『國家篇』中の社會政治的理想を現狀に照して考へ、ギリシャ人の生活の現狀から、實現の可能がある様にしようとの種々なる試みをしてゐる。又、歴史的事實を立脚點としてゐることに於いて、この『法律篇』は古代研究の上に意義あると共に、歴史的事實に對して、プラトンのとつた態度は、彼の傾向を理解する補ひをなすものである。

彼がシラクスで學び得た經驗は、彼が抱いてゐた理想を實現するに困難なことが判つた。然しながら、彼は、尙ほ彼の理想主義に粘り強くも斷念し得ない。彼がこの『法律篇』でとつた譲歩は、自己の見地を變へた故にあらずして、人間の心と社會とが、完全な域に達する迄、實際上の必要から譲歩をしたまでである。若し、今や我々が最善を成就することが出來なければ、目的に對する手段として、次善で満足しなければならない。

『國家、政府及び法律の第一最高形式は「友は萬物を共有する」と云ふ古の格言の最も廣く行はれてゐる點に存するものである。現在であれ、將來であれ、いづれでも、この婦人、小兒及び財産の共有が行はれる所ならば何處にあらうと、そこには私有及び個人のもものは共に生活から消え去つてしまふ。……若し、人々がそれ以外の原則に従つて行動するならば、決して、それ以上に眞實で、良好であるところの國家は組織することが出來ないと私は云ふのである。

それ故に、我々はこれを國家の模範となし、これを守り、我々の全力を盡して、これに相似た國家を求むべきである。……現に、我々の手中にある國家は、創られたる時に、最も永久性に近く、第二位に位する唯一のものであらう。』(註)

註 The Laws, p. 739.

『市民をして直ちに彼等の土地及び家屋を分配せしめよ。土地は共同に耕作せしめてはゐけない。』と云ふのは、商品の共有は、彼等の考へた源と性質と教育を越へてゐるからである。』(1) この個人への家屋及び土地の割り當てに於いては、國家は取締りをするであらう。共有の商品に對しては競争を制限する。『立法者は貧富の限界となるべきものを定めるべきである。貧困の限界をして割り當て土地の價格たらしめ、これを保有されるべきであり、又如何なる支配者も、德行に對する名聲を後世に傳えんと志す人は何人でも、如何なる場合でも、その割り當て土地を損する様なことを許してはならない。これを立法者は標準としてきめ、人に、この額の二倍乃至三倍或は四倍迄も得ることを許すべきであらう。然しながら、若しも、人が富を發見したか、他から人に與へられたのか、或は商賣に依つて富を造つたのか、標準を超過してゐる何等かの好運に依つて獲たかで、人が大なる富を有したならば、又、人が國家及び國家の守護神に對して剩餘を返すならば、その人は何等罪科もなく、名聲も失はせないであらう。』(2)

かくして、先きに財産の私有が禁せられてゐたのに、今は僅かながら、その私有が許されたのを見る。又、彼が生産の個別化を承認せるとは云へ、尙ほそれを社會機能と見做し、數量と使用とに關してはそれを制限してゐる。消費は『生産の一部分を支拂ふことである』から、尙ほ社會化されてもゐるし、共有の衣食は分け與へられて、夫も妻も、その家族も『共同の食卓』に坐るのである。(3)

註 1. The Laws p. 740.

2. Ibid, p. 744

3. Ibid, p. 806.

婦人に關しては『國家篇』の思想は、共同の教育、訓練及び共同の責任を必要とせしめる公共活動の點で、主張され、完成されてゐる。結婚に關しては、『國家篇』中にては詳細な記述が發見されない。結婚は一夫一婦主義である。『國家篇』中に於いてこの問題を論じてゐると思ほしき所に依れば、生産階級にもこの形式を是認してゐるかの如く考へられる。『法律篇』に於いても國家に於ける私有財産制と同様、この結婚は常に公益の爲であり、國家に依つて嚴重に統御せられるのである。『誤解を避ける』爲に、あらかじめ、結婚前に『よりよき知己』となつておくことである。(1)矢張り、こゝでも優生學を考慮せらるべきことを強調してゐる。(2)結婚が國家

にとつて重要であると主張されてゐる。

『各人は自己に最も好めるところの結婚を求めないで、國家に最も有益なるものを求めさせるのである。』⁽³⁾ 社會利益に就いて經濟を超越せるものを考慮すべきである。『我々は人々の心をして、その子女の性質の等しきことは、結婚せる時の過大の財産の等しきことよりも重要なを信ぜしめるべきである。』⁽⁴⁾

註 1、The Laws, p. 771.

2、Ibid., p. 772, 775.

3、Ibid., p. 775.

4、Ibid., p. 773.

『これ等の法則は、若し正しく考究するならば、現状にては正確に行はれないであらうし、婦人、小兒、家屋及び其他一切のものが個人の私有財産たる限りに於いては行はれないのであらう。然しながら、若し我々が次善の國家形式に達することが出来れば、我々はうまくやれるのである。』(註)

註 The Laws, p. 807.

『國家篇』と比較して、一層實證的、實踐的説明を加へてゐる『法律篇』はその著作全體を通じて、『國家篇』中に於いて著しく缺けてゐた科學的方法を僅かながら認めることが出来る。社會

は人心の構成に存する故に、人心は餘り論理に依つて支配されずに、經驗から來る感化に依つて一層支配されるものである。この變化を著しく示せる有名なる一節がある。プラトンが政治の種類に就いて話してゐる箇所である。

『殖民が若し一民族より出來てゐて、人口過剰の壓迫の爲めか、或は、他の同種の必要の爲に依つて、友達は友達を捨て、顧みざるか、又は國家の一部分が黨派に依つて、移住を餘儀なくせしめられた場合に依つて、一群の蜜蜂の如くに一國から送られるならば、都市は若干の點の於いて、殖民の容易なることを認める。又、戰爭して優勢なる勢力に依つて、全く征服せられた時全都市が逃げたこともあつた。然しながら、これは一方に於いては、殖民者或は、立法者にとつて利益であるが、他方の見地に於いては困難が生ずる。素より人種、言語、法律の點に於いても類似があり、又神社及び祭典に於いても同じであるけれども、この同質より成る殖民地は如何なる法律も、如何なる形式の憲法も、彼等がその本國に於いて有したものと異なるものに對して反抗する傾きがある。たとへ彼等自身の法律の不良が、彼等間に黨派の起つた原因であつても、彼等は習慣の力からして、自己を破滅に導いたところのその習慣を甘んじて保存せんと欲し、彼等の立法者なる殖民地の首領は、彼等を煩はしとなし、謀叛せりとするに至る。これに反して種々なる人民の集合は、新法律に服する傾きは多分にあるが、然し彼等

をして結合せしめ、彼等を共に集めることは、之に就いて云はれるが如くに、最も困難なる事業にして、年數のかゝる仕事である。

人は決して立法するものではなくして、あらゆる種類の偶然なる出來事があらゆる種類の方法に於いて立法するものであると私は云はんとする。戰爭の激甚、貧困の切なる必要が常に政府を覆し、法律を變更する。又、傳染病が流行したる場合に、或は、悪い氣候が長年間に互つて續いた場合に、疾病の勢力は往々にして、革新の原因たらしめる。すべてかゝることを見た者は、當然、私が云はんとするが如き結論になるのであつて、それは、如何なる人も何にもものをも立法せずして、人事に於いては偶然が殆んどすべてである。』(註)

註 The Laws, pp. 708-9.

この點に就いて、ギデイングスは云ふ。『私の知れる如何なる後世の著作に於いても、人類社會の性質及び作用に關してこの文章の含むが如きかゝる多くの基本的概括をかくも僅かな言葉で表はしてゐるものを見ない。』(註)

註 Studies in the Theory of Human Society, p. 96.

實にプラトンの全著作に通じて見ても、環境の影響に關して、これと同様の眼識で以つて社會作用の點のみならず、人間心性に就いての概念を説明せるところは見當らない。これは、哲

學者が科學者になつた著しき一例とも云ひ得よう。

第十節 結論

プラトンの社會哲學全體に亙つての思想は、ギディングスに依つて手際よく要約されてゐるからそれをこゝに引用して結論に代へるであらう。

『社會哲學はその生成時代に於いて、最も困難なる問題たる、個性に關する個人の因果關係と、社會に及ぼす作用との問題にぶつかつた。これは社會の性質に關する組織的研究が神人同形説時代からの遺贈であつたからではなかつた。却つて、それは始めて人が眞の意味での市民となり、又自由な、自然に發展した社會組織ではあると云へ、人々が幾分か自己の經濟上、道德上の運命を支配し得たと經驗から證明した、かのギリシャ社會に起つたからであつた。國家形成の軍國主義に依つて促がされ、硬化されたエジプト及びバビロニアに於ける政治上の結合は、西方全土を殘忍なる專制政治へと導ひた。曾つては自由で幸福を楽しんだ人々は虐使に依つて非常に壓服されたので、希望などと云ふものは人々の中に殆んど死んだものと同じである。如何なる地上の力の手でもつて、救濟せんとしても望みなく、自分自らを疑つて、人々は各自の氣質に従ひ、忍従の宗教又は默示録の幻影を追ふ宗教を創造し、それに従ふことが出來たのみである。多島海に於けるギリシャ世界では、地勢も、又民族も共々あまりに權力の集中を妨

げる様であつた。都市國家は依然として自由で、自尊心を持つてゐた。人々は自己を信じ、その同胞を尊敬してゐた。自己の思想に適合せしめた國家に對するの忠は、藝術上の創作に喜んだと同様に、政治上の忠に喜び、人々は國家を完全に作り得たと信じ、それに依つて自己を完成したと信じた。それ故に、過去から我々に至る迄の人類社會の性質及び可能性を論ずる最初の抱括的著作はプラトンの理想國『國家篇』であつた。

この著作が我々の人類社會の推論知識に對してなした不朽の功績は、その共產的生活方法に發見されるに非ずして、むしろ道德力、社會力の分析、相關に、就中、個性に關する社會反動の問題に對する眞の解決に發見されるのである。個人的原因としての人間が、事實に於いて自己の意志に従つて共和政治を形成することを得ると假定し、努力の最終目的は善行生活の完成——その生活は理由を是認し得るこれ等種類と程度に於ける愉快なる動作に本質的に存すべきである——であると假定して、『國家篇』はかく思考した『善行生活』も、畢竟、理性と人間意志とを創造するであらうある一定の客觀的狀態——それが『正義』と呼ばれるもの——に依存してゐることを表明してゐる。加之、理性と意志とは直接に正義を創ることを得ない。それ等は社會秩序を美事に調整することに依つてのみ正義を建てられることが出来る。かくして、プラトンの思想に於いては、『善行生活』は『正義』の一機能であり、正義を維持することは社會組織

の機能である。』(註)

註 Op. cit., pp. 101-2.

この二つのプラトン研究に關する文獻數種を擧げて置く。

- Barker, Earnest; *Greek Political Theory, Plato and his Predecessors*, (Methuen, London, 1918)
- Bogardus, Emory; *A History of Social Thought*, University of Southern California Press, (Los Angeles, 1922)
- Potstorf, G.W., and Sihler, E.G.; *Hellenic Civilization*, (Columbia University Press, New York, 1915)
- Burnet, John; *Greek Philosophy*, (Macmillan, New York, 1914)
- Bury, J. B.; *History of Greece to the Death of Alexander the Great*, (Macmillan, New York, 1906)
- Dunning, W.A.; *Political Theories, Ancient and Medieval*, (Macmillan, New York, 1902)
- Giddings, F.H.; *Studies in the Theory of Human Society*, (Macmillan, New York, 1922)
- Gomperz, Theodor; *Greek Thinkers*, (tr. by Betty, Murra; London, 1913)
- Grote, George; *History of Greece*, (Harper, New York, 1865)
- Grote, George; *Plato and the Other Companions of Socrates*, (Murray, London, 1867)
- Lichtenberger, James; *Development of Social Theory*, (Century, New York, 1923)
- Loos, Isaac A.; *Studies in the Politics of Aristotle and the Republic of Plato*, (University Press, Iowa City, 1899)
- Nettelship, R.L., *Lectures on the Republic of Plato*, (Ed. by Charmwood, Macmillan, New York, 1914)
- Plato; *The Republic*, Tr. by Jowett, in *Dialogues of Plato*, Vol. III. (Oxford University Press, Third Edition, 1892)
- Plato; *The Laws*, Tr. by Jowett, same Vol. V.
- Stein, Ludwig; *Die soziale Frage im Lichte der Philosophie*, (Ferdinand Enke, Stuttgart, 1923)
- Windelband, Wilhelm; *Platon*, (Fromman, Stuttgart, 1923)